秀吉の愛憎、其勢力を記し、第十章に於て北政所と淀殿との關係にては貞淑にして人望ありし北政所と、驕聞を傳へられた淀殿との間に自ら抗爭の生ぜしは自然の數にして、閨中黨を立て關ヶ原役の誘因たりし事否むべからずと言へり。第十一章太閤の同胞にては太閤の異父弟秀長、姉日秀、妹南明院夫人の事蹟を略述し第十二章小早川秀秋にては北政所の弟たる彼が隱然として太閤の後繼者を以て目せられしに、出でゝ小早川隆景の後を繼ぎ、朝鮮再征の主師に任ぜられながら、駑鈍にして、暴慢なる彼は、隆景の營制に違ふ事多く、關原役には終に家康に應じて西軍潰敗の種を播きしは全く北政所の指示に依れるならんと推定す。第十三章結論に於て、秀吉は政略上父を顯はさゞりしも、其祖先に對しても父に對しても相當に奉仕せし事、養子相踵で斃れ、家庭の主人としての不運を認め、宗族に對して寬厚其宜きを得たるも、なほ淀殿を溺愛せゝ事を指摘して彼は理性の人に非ずして情の人なりと斷じ、太閤の同情を惹く所以亦こゝにありと結ぶ。三五版三百頁餘の小冊子ながら、よく太閤の內的生活を叙說し、加ふるに隨所に畫像、筆蹟、墓所等の寫眞三十五葉を挿入したれば謂過の際無限の感興をそゝるを覺ゆ。（日本學術普及會發行、定價一、八〇）〔中村〕

元祿時代觀　文學士　中村孝也著

本書目次記する所、元祿時代の地位、町人階級の勃興、元祿寶永の政局、元祿寶永度の金銀貨改鑄、元祿享永前後の世態、元祿時代の文藝、ケンペルと元祿時代あり。著者は元祿時代を以て近世文化史上の最高潮期なりとして、文運の隆興、藝技の昌榮と濃麗豪快の氣尙と應揚寬濶の世相を讚美せんとしたるが如し、著者は此くの如き時代の開展は幕府政治の成立を安全ならしむべき重要問題、卽ち對外、財政、朝廷及諸侯並に浪人に關する諸種の問題が何れも此時代に於て解決せられたるに因由するものとし、且つ此時代の特殊の色彩には町人階級の勃興ありて、大江戸の如き大都市の發達、武家と町人の接觸等を見るに至り、政治の方面にては政治家の個性と政局の推移に論ずべきものありとし、一般世態に就いては敵討淫靡の繁昌情死の流行より浮世草紙淨瑠璃、講界の狀況等を詳說し、時代の國民生活を論ぜり。本書もと讀者と共に史興を樂まんとして、著者の筆を走せしものと其自序に記する如く、其敍述に於ては必しも精選琢磨を經たるものと云ふにあらず、繁簡に於て人考ふる所を異にすべしと雖も、而も行文興趣あるに力めて著者感興の來往觀る如く、又一般讀書界の讀物として薦むべきものなるべし。（啓成社發行、價二、八〇）〔西田〕

神祇史綱要　宮地直一著

本書は著者が昨年四月東京文科大學に於ける公開講義の手記に